

## 天声人語

7歳と5歳の子どもが父親と公園にいと、警察官に職務質問された――。本紙の「声」欄に先日、そんな投稿が載った。

「自粛中に遊んでいる」との通報があったという。この春、公園の光景が各地で一変した▼そもそも公園は何のためにあるのか。近代史を調べて驚いた。明治時代、政府が初めて公園を造ったのは主に防疫のためだった。コロナの伝染は空気中の湿って汚れた「瘴気」によるものと考えられ、土地を乾かすには空間を開放するのが良策とされた▼「公園は都市の肺である」。伝染病に苦しんだ欧州で唱えられた説が、維新後の日本にもたらされる。「公園は腐を転じて鮮となす」「精神の洗濯場、空気の転換場であれ」。文豪幸田露伴も著書で熱く訴えた▼なお多くの人々が巣ごもり生活を送る都市部では、公園は数少ない憩いの場である。とりわけ子どもたちには貴重な居場所だ。「立ち入り禁止」のテープが巻かれた遊具は、見るたび悲しい。こぞって使用禁止とされたのは自治体の横並びゆえか▼「批判を恐れた行政が過敏に反応した結果かもしれせん」と話すのは立教大の小野良平教授(57)。

公園の歴史や設計に詳しい。「そもそも公園はゆとりの場。だれもがふらりと立ち寄って、ボールと過ぐすことのできる空間であってほしい」▼行く先として公園しか浮かばないのに、行くのがはばかれる。百五十余年前に「都市の肺」として生まれた場所で、深呼吸も自由にできないのは、皮肉な話であろう。